
LOVE□HEART

きのりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE□HEART

【Nコード】

N0582H

【作者名】

きのりん

【あらすじ】

中1の岡本萌は、隣のクラスの佐藤隆生が小学校3年生の時から好きだった。その萌と隆生が今、未来、どのようになっていくのか？ドキドキはらはらの恋物語です。

∴∴∴
∴+*+*+∴∴∴∴
∴+*+*+∴∴∴∴
∴+*

☆プロローグ☆

こんにちは！！！！ロリポップです。

このお話は、

萌の恋のお話です。

ひやかされ、泣いて。

励まされ、笑って。

そんな忙しい萌の甘く、切ない物語。

たくさんの方々に見ていただけると幸いです。

・・・・・・では、本文に行きましょう。

A r e y o u r e a d y ?

第1話 出会い。

．．．．．眠い。

まったく、今日もだりいなあー！！！！

小学校からずっと朝は眠い。

あーあ。

今日も授業めんどっちいなあー
ま、でるしかないか。

．．．．．と、そんな毎日を送っていた。

でも、あいつに会ってからは違った。

小学校3年生の頃――

わいわい――がやがや

「ねえー知ってるー？ 今日転入生が来るんだって！！！！」

「まじー？ 男？ 女？」

「えっとねー女！！！！」

「へえー！！！！カワイイ子だといいね♪」

「ねー！！！！」

ガラガラ．．．――

「転入生を紹介するぞー！！！！」

「よッ！！！！まってましたー！！！！」

「静かにしなさい！！！！ 入ってきて良いぞ。」

ガラッ

「あ、〇〇小から来ました。岡本萌です。」
ざわざわ・・・

「ねー・・・結構普通じゃない？」

「なー！！！！でも雰囲気が良い感じ♪」

「・・・よろしくね！！！！」

席に着く。

そしたらすぐに声をかけられた。

「よ！！！！俺、佐藤隆生。よろしくな！！！！」

「ウン☆ウチは岡本でーす！！！！よろしく☆」

隆生とは隣の席だった。

これが2人の出会い。

この日から。

学校に行くのが楽しくなった。

だって、隆生って言う友達も出来たし。

なんか明るいクラスだし。

楽しめそうだよ・・・☆

ここから、私は学校を好きになった。

でも、まだ、隆生を好きだなんて、気づいていなかったんだ

そう、今はなにも

第2話 好き・・・？

そして、萌が転入してから
1ヶ月がたった。

冬休み開始2日前

萌は学校を休んだ。

たくさん荷物を持って帰らなきゃいけないのに・・・

次の日、元気に学校に行った。

「岡本。」

「はい？先生。」

「昨日休んだから、この荷物今日全部持って帰れよ！！！！」
ドサツツ！！！！！！

「えー！！！！こんなに？」

「昨日休んだんだから仕方ないだろう。」

「はぁーい・・・・・・。」

放課後、

めっちゃいっぱい荷物をよろよろしながら
歩いていた。

「はぁー・・・・・・重いなぁー・・・・・・。」

そんな独り言を言っていた。
すると

ヒョイツ

「!?!」

突然左手の荷物がとられた!?!?!?と思ひ、
後ろを振り返ると

隆生がもっていてくれた。

「もってやるよ♪」

「え・・・いや、イイよ? 思いッしょ?」

「ううん。お前ん家まで持ってく。」

「え・・・じゃあ隆生ん家通り越しちゃうよ?」

「うん。それでもいいよ。」

そのまま隆生の家も通り過ぎて、

私の家の前に着いた。

「はい♪」

隆生が軽そうに私に渡す。

「あ・・・さんきゅ☆」

「おう。でも軽かったから。じゃな」

「ウン。ばいばい。」

私は隆生が遠くなるまで見ていた。

でも隆生は手や肩をぶんぶん回していた。

・・・・・・・・ホントは重かったくせに!?!!
かっこつけたなー!?!?!?!!

でも何よりうれしかった。

心の中でドキン・・・・・・・・と胸が高鳴っていた。

もしかして・・・・・・・・。

隆生のことが・・・・・・・・・・

好き
|
?

いやいや、

まだ小学校3年だよ？

そんなたった1度の感情じゃん。

そうだ、

これは勘違いだ。

そう。勘違い。

私はそう信じることにした。

第3話 ココロ

・・・・・・・・だめだ。

今日もドキドキしてる。

あいつを目で追っている。

いや、でも”友達”として、目でおってるんだ。
うん。きっとそうだ。

そう思う日々が続いた。

でも、ドキドキはとまらない。
目で追うのもとまらない。

胸の奥のどこかで

「おい、素直になれよー！！！！」
って言ってる自分が居た。

でもそんなのはもちろん無視。

隆生もなんだかそっけなくて
目があっても、そらされたりしていた。

話しても、

20秒くらいで会話は終了。
あの日から、あまり話さなくなった。

でも、萌はなんだか変わった。

あの日から、ドキドキして夜に眠れなくなっていた。

寝不足・・・

小学生の萌にはダメなこと、

ましてや今、すぐく身長が伸びてる時期だったので、
立ちくらみが多かった。

しかし、立ちくらみも限界が来た。

ついには、貧血でたおれてしまった。

・・・・・・・・・・・・・・・・ぱちっ・・・・・・・・

ココは・・・・？

「あ、起きたか。」

ガバッ 萌は勢いよく起き上がった。

「!？」

「なにびびってんだよ!!! お前倒れたじゃねえカヨ。」

「・・・・・・・・？なんで隆生がいんの？」

「何でって・・・・・・・・俺が運んでやったのに。」

「え・・・・・・・・？隆生が運んだの？」

「そうだよ。重かったけど♪（笑）」

「ひど!!!! そんなに重くないもんね!!!!」

久々に隆生と笑いあった。

「あ・・・・・・・・」

勢いよく起きたせい、少しクラッとした。

「お・・・おい！？大丈夫か！？」

隆生がすかさず手をさしのべてくれた。

・・・・・・・・ドキン

まただ、なんでこんなにドキドキしてんの・・・？

「あ・・・ありがとう。」

しばらく沈黙が続いた。

次に話し始めたのは隆生。

「あのさ・・・・・・・・俺」

「何？」

「あ、いや、なんでもねえよ！！！！お前は寝とけ！！！！」

「うん・・・・・・・・おやすみ・・・・・・・・。」

私は眠りについた。

あるとき、隆生は何を言おうとしたんだろう。

まあ、私には関係ないこと。

・・・・・・・・でも、やっぱり分かっちゃったんだ。

私は・・・・・・・・

隆生が好き

ココロにうそはつけない。

好きなんだ。

隆生が。

そう、ココロから。

いつか、この気持ちを伝えられたらいいなあ
・
・
・
・
・
・
・
・

第4話 思い。

・・・それから1年が過ぎた。

萌は小学校4年生になっていた。
けれど萌の思いはかわらない。

隆生がすき。

いつ思いを伝えられるの？

いつ君はこの気持ちに気づくの？

いつ、思いが届くの――？

そんなコトばかり言っでは

思いは通じない。

でも思いを届けたい。

でも届けたくない。

思いを伝える手段は一つ。

告白

そんな勇気、萌にあるわけ無い。

そんなコト言えたらきつと苦労しない。

どういう風に言うの？

・
・
・
・
・

思いを伝えて。

何をのぞむの？

・
・
・
・
・
分らない。

萌は何をのぞんでいるのだろう？

隆生を自分の物にしたいの？
親しくなりたいの？

分らない。

でも、ココロの奥底で
隆生を求めている。

隆生。

私に気づいて。

私の気持ちに気づいて。

……大好きだから……。

そんなことをココロで叫んでいても
隆生には届かない。

ダメだ。

思いを伝えなくちゃ。

隆生が好き。

隆生じゃなきゃいやだ。

私だけを見てほしい

お願い。

隆生。

好き。

もうおさえられない。

好き

好き

好き

世界で一番。

もう、思いを伝えたい。
がまんできない。

大好きなの。

あと、2週間でバレンタイン。

その時だ。

その時に思いを伝えよう。

第5話 バレンタイン

・・・・・・・・明日はバレンタイン。

今日はチョコを作ろうと思う。

友達にもあげたいし・・・・・・・・

なにより、

隆生にあげたいし。

あーあ！

なんて言ったらいいんだろう？

どうしたらいいんだろう？

「ギリだから！」

って言えばいいかあ・・・・・・・・

いつもお世話になってるってコトで・・・・・・・・☆

そして、

次の日

放課後。

「リュ・・・隆生！」

「ん？チョコか？（笑）」

「はい。」

「え！？まじ！？超うれしいんだけど！」

「ギリだから！勘違いすんなよ！」

「・・・・・・・・とか言ってホントは本命？（笑）」

「・・・・・・・・カモね。」

「え・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ウン。まじかも。」

「ってなに冗談言ってるんだよ！」

「ははは！冗談だよ！じゃ、まったねー☆」

・・・・・・・・普通に渡せた。

本命？とか聞いてくるなよおー

恥ずかしかったじゃんか！

でも2人で良かった・・・・・・・・（汗）

次の日――

ざわざわ・・・・・・・・

「おはよおー」

・・・・・・・・しーん

あれ？何だろう？

「萌・・・・・・・・ひそひそ・・・・・・・・」

え？

「おい！岡本って昨日隆生に告ってんだってえ〜！
！？

こくった！？

こくってないよ！？

冗談だって言ったじゃん！？

「え！？こくってないよ？」

「ふうーん。俺ら見てたんだけどなあー☆」

「ああ・・・冗談って言って笑ってたんだけど。」

「あっそう。じゃあコレはイイのかな？」

取り出したのは――

萌の日記

「!?!?え……!?!?それはダメ!」
必死で取り返した。

だってそこには
隆生のコトが好きってかいてある。

「ぎやははは!もう中見ちゃったからいみねえーよ!ばーつか!
しかも、隆生にいったよ!ぎやはは!」
「……………ふざけんな!」

萌は教室をでた。
走った。走った。

仲の良い子が追いかけて来たけど、
リレーの選手の私に追いつけるわけがない。

裏庭で泣いた。

ぼろぼろにされた。

もう、この恋は絶対に叶わない。

もう、何もかも終わった

ざッ

「!?!? だれ!?!?」

「.....俺」

「.....りゅ.....隆生.....」

「お前。俺のこと好きだったの?」

.....

「.....ウン。」

「そうか。」

「そうだよ。」

「俺は.....」

「もうイイよ! 教室帰ろう!」

隆生が何か言おうとしたのを遮った。

「もうウチのコトは気にしないでいいからさ!」

「.....あ.....うん.....。」

あの時、何を言ったのか知りたくなかった。

でも、後になって、

しつとけばよかったのになあ」と

第6話 トモダチ

バレンタインから1週間が過ぎた。

相変わらず、男子からは

「岡本おー隆生のコトが好きなんだろおー？」
って言われるようになっていた。

でも、私も隆生も

「いや。ただの友だちだから。」
と普通に言い返していた。

もう、叶わないのわかってるから。

しょうがない。

あきらめるしか……

って——私にあきらめるなんて勇氣は無い。

まだ好きなんだもん。
しょうがないじゃん。

でも未だに心残りがある。

隆生はあるとき……

何を言おうとしたの？

「俺は・・・・・・・・」

俺は・・・？

俺はなに？

まあ、私が話を遮ったんだけど・・・

俺はお前が嫌い？

・・・・俺は・・・・お前が好き

ぎゃあー！？

ソナなこと言われるはずないじゃん！

でも・・・・・・・・

少しだけ期待してもいいのかなあ・・・・？

隆生

ゴメンね。

まだ、好きなんだ。

あきらめられるハズが無いんだ。

好き。

多分。どんなに嫌いって言われても。
どんなにうざいって言われても。
ずっとずっと好き。

それだけは変えられない。
事実。

まだ、しっかり思いを伝えていない。

友だち止まり。

それでもイイかな。

なんて思った時もあった。

でも、それじゃダメなのかもしれない。

給食の時……

『今日の放送は、あの大人気歌手の新曲♪
遊助のたんぽぽです!』

愛してるっちゅう手紙
不器用なこんな僕に
優しくちゅーする女神
聞いたら胸にしまっというて
ああ この歌にたくすよ

幸せを誓い

・・・私の好きな曲。

愛してるっちゅう手紙。

書けたら良いなあ・・・

第7話 クラス替え

新学期の朝

「きゃあー！遅刻ううう！」

新学期の朝から遅刻！？

マンガみたいなパターンだ。

萌はあわてて家をでると、

少し行ったところに隆生が走っていた。

追い抜かし、

「おっさきいー♪」

と行くと、隆生が

「ちょ！お前も遅刻するのか？（笑）」

「へーんだ！ウチのほうが足早いんだよ！」

「なんだとおー！？」

猛ダッシュで二人。

学校に向かう。

そう、遅刻しないために（笑）

でも、

萌にとって。

今日は運命の日。

そう

今日は・・・

クラス替え。

3年4年は、隆生と同じクラスになった。
でも・・・さすがに3年連続は無いだろう。
うん。
無いよね。

.....。

ビンゴ。

クラス離れました。

萌は5年1組。

隆生は5年2組。

・・・神様の意地悪！

なんだよおー！

・・・仕方なく教室に入る。

普通に仲の良かった子もたくさんいる。

でも、隆生がいない。

それだけで、心にぽっかりと穴が開いた気がしたんだ。

そんなに目で追っていたんだなあ・・・と。

でも、好きなのは変わらない。

好きだから。しょうがない。

愛してるよ。

隆生

でも、この時は何も。

これから起こることを。

萌は何もしらなかったんだ

第8話 誰？

クラス替えから数ヶ月。

あるうわさが広がった。

「――ざわざわ――」

「ねえ、萌知ってるう？」

「えー？なにがー？」

「えー！！知らないの？」

「・・・うん・・・？？」

「隆生と紗帆ちゃんが付き合ってるってウワサ！」
・・・え？

付き合ってる・・・？

「え・・・まち・・・？」

「うん！この前二人で居るの見たよ？」

・・・隆生？

どうして・・・？

放課後一人で泣いていた。

ガラッツツ

「!？」

振り返ると、そこには
健吾がいた。

「・・・？岡本？」

「・・・グスッ」

「・・・泣いてんのか・・・？」

「ほっというてよ！」

「・・・いいよ。泣けよ。」

健吾は5年になって初めて同じクラスになった。

元気だし話やすい。

萌は泣いた。

これ以上涙が出るのか？

というくらいに

「・・・落ち着いたか？」

「・・・うん・・・ごめん・・・ありがとう。」

「なんだよ！ありがとうなんて！・・・そんなことより何で泣いて
たん？」

「・・・・・・・・・・」

「話せなかったら良いけど・・・・・・・・もしかして・・・・・・・・隆生のこと？」

「・・・・・・・・・・うん・・・・・・・・・・」

ポロっと言ってしまった。

「そおかぁ。岡本は隆生が好きなん？」

「うん。ずっと前から。」

「そおか・・・・・・・・」

沈黙が続いた。

なんでこんな相手に話てるの？
分からない。デモ、落ち着く。

ありがとう・・・・・・・・健吾・・・・・・・・

でも、もう無理なんだ。
萌に隆生は来ない。

隆生は他の人を選んだ。

無理なんだ。

第9話　ありがとう。

「・・・ごめんね！突然泣いてて。」

「いや？いいよ。だって――」

「ん？最後なんて言ったの？聞こえなかった！」

「何にも言ってるよ！」

「ふうーん・・・そおっか・・・」

「おう・・・。」

突然泣いた萌と一緒に居てくれた

健吾・・・

ごめんね。ありがとう。

でもね。

泣いても何もはじまらない。

まずは隆生に聞いてみよう。

そうしてみる。

すると、次の日の行きにばったり

隆生にあった。

「・・・よう。」

「・・・よう・・・。」

「・・・。」

「・・・あのさ・・・。」

「ん？なんだ？」

「隆生・・・紗帆ちゃんと付き合ってるの？」

「・・・ああ。」

「なんで？」

「・・・え、紗帆に告白されたから。」

「・・・ふうん・・・」

「・・・何？お前寂しい？」

「・・・うん。」

「え・・・？」

「寂しいよ？」

「・・・そ・・・そうだよな！俺様が居なくなるんだもん！」

「うん・・・」

沈黙が続く。

「じゃ・・・じゃあウチ先にいくね！紗帆ちゃんとお幸せに！」

走り出した。

「え・・・萌！！！！」

隆生が・・・萌の名前を呼んだ。

でももう振り返らない。

振り替えない。

好き。

でももう届かない。

ごめんね隆生。

もう好きじゃない。って思わせてるの。

タダの友だち。

もう知らない。

その日は健吾と他の友だちと遊ぶ約束をした。

健吾といたほうが心が落ち着く。

悲しくならない。

隆生といると切ない。

でも健吾となら自然でいられる。

健吾は黙っておいてくれた。

隆生のことで泣いていた萌のことを

もう・・・隆生は忘れるんだ。

あの人はもう関係の無いひと。

紗帆ちゃんと、幸せになればいい。

第10話 突然の告白

ふー！

なんか吹っ切れたかも！

もう・・・どうでもいいやあ。

隆生と紗帆ちゃんが

つきあい始めたコトを聞いた日から

心のどこかに穴があいた気がした。

でも、萌にはもう関係の無いヒト。

紗帆ちゃんと幸せになればいいじゃん。

「よ！岡本！」

「ん？あ、健吾じゃん♪おはよおー」

「なんだよ！朝からしけた顔しやがって！」

「してねーしッ！」

「ふーん。じゃ、もうあいつはいいのか？」

「・・・は？」

「は・・・？って隆生だよ！」

「別にーもうあいつは関係ないしw（笑）」

「そか。じゃあ俺が」

「は？語尾が聞こえませーん！」

「うるせーよ！」

「ふんだ！早く学校いくぞおー！」

健吾とは普通に話せる。

でも、健吾の方が隆生のことを

気にしてる気がした。

気のせいかもしれないけど・・・

学校では、隆生をさけた。
何度か名前をよばれたけど・・・。
振り返る必要はない。
他人と話す必要はない。
あれ？タダの友だちから他人になつてゐる・・・
でも、それくらいの男だったんだ。
新しい恋を見つけよう。

それから3ヶ月が過ぎた。

季節は冬。

あいかわらず隆生をさけていた。
しかも、隆生から話しかけてくることはなくなった。
健吾とは家が近かったので毎日のように遊んだ。
ある意味、充実した毎日を送っていた。

そういや。今日は2月10日。
バレンタインまで後4日。

今年は誰にあげよう・・・。

そんなことを考えながらぼーっと学校に向かっていた。

「おーい！岡本ー！！」

「あ・健吾！おっはあー☆」

「なあーにおつはーだよ!」
「なんでもいいじゃんかあ☆」

笑いが絶えない会話。

ずっとこっちのほうが楽しい。

「・・・そういやもう少しでバレンタインだな。」

「なに? ほしいの?」

「・・・ウン。」

「え!? まじで?」

「・・・うん。」

「じゃ、あげるよ☆まずいかもしれないけどw」

「まじ!? やった! つか岡本が作ったら絶対うまいし☆
料理すきなんだろう?」

「・・・料理好きなのなんで知ってるの?」

「・・・え・・・そりゃあ調理自習とかでさ。」

「ああ・・・調理自習ねw」

「そおだよ!」

「ま、萌様のおいしいチョコを作ってあげよう!」

「おう! さんきゅーな!」

萌はギリのつもりでつくった。

これから起こることを何も知らずに

2月14日。
バレンタイン当日。

「健吾！おっはよおー」

「おお！岡本！」

「はい！これ♪」

「まじ？ホントに作ってくれたんだあ？」

「うん！おいしいよおー（笑）」

「・・・でさ。」

「ん？なにに？」

「えつと・・・」

「はやく言ってよ！！」

「俺・・・」

「うん・・・？」

なんか様子がおかしい。
なんだろう・・・？

「岡本が好きなんだけど。」

え・・・？す・・・好き？
健吾が？健吾が？
どうして・・・？

「俺じゃ・・・隆生のかわりにならないか？」

いや。

隆生はもう関係ないヒト。

でも健吾の突然のことばに行き詰まっていた。

「返事はいつでもいいから!じゃ!」

健吾は走って行ってしまった。

どうして?本当に?

ちょっとうれしかった。

でも、その日は恥ずかしくて顔も会わせられなかった。

・・・健吾と付き合う?

でも隆生は?

隆生は?

りゅ・・・・・・・・隆生は・・・・。

もう・・・・・・・・関係のないヒトだから。

健吾と付き合っても良いのかもしれない。

次の日、朝、健吾が歩いているのを見つけ、走って追いかけた。

「健吾！おはよう」

「・・・・・・・・？お・・・・・・・・よ・・・・・・・・！」

「あのさ・・返事なんだけど・・」

「・・・・・・・・！おう・・・・・・・・」

「うち・・・・・・・・」

「おう・・・・・・・・」

「健吾と付き合うよ！」

「え！？まじ？断られると思ってたあ！」

「断るわけないじゃん！こんなイイ男」

「。。。。」

「あれ？てれた？」

「て・・・てれてなんかいねーし！」

「ふーん♪ま、これからよろしく☆」

「・・・・・・おう！」

これで・・・・・・良かったんだ。

もう心残りはない。

健吾と付き合う。
それだけのこと。

もう・・・・・・元には戻れない。

第11話 約束（前書き）

しばらく時間が空いてしまってますいません（^―^；）
テストでして・・・（^―^；）
これからまた書き始めますのでよろしくお願いします！

第11話 約束

・・・健吾とつきあい始めて1週間がすぎた。
さすがに・・・隆生にはばれた。

でも、もう隆生の目なんて気にならなくなった。

ちゃんと、

健吾が好きになった？

なった・・・？

まだ・・・分からない・・・

本当に好きなの？

自信をもって、「はい。」と言えますか？
言えませんか？

どうなんですか？

本当に、健吾が好きなんですか？

自分が自分に問い詰める。

自分は答えられない。

口に出せない。

好きなの？好きじゃないの？
分からない。

でも、つきあってるんだよ？
中途半端じゃだめじゃん。

でも、心の奥底に
隆生が見つめている気がした。

「なんだよ。隆生が好き何じゃん。」

「え．．．．．？」

「俺、中途半端な女嫌いだから。もう、別れよ。」
「え．．．．？ちよつとまって！健吾．．．．！！！」

ハッツツ！?!？

．．．．夢か．．．．

健吾が行ってしまった夢。

．．．．現実になったらどうしよう．．．．

いや。そんなのいや。

隆生はタダの他人。

健吾は彼氏。

もう、元には戻れないんだから、

いいの。

『隆生好き?』

心の声が聞こえた。

私ははっきり答える。

『ううん。もう好きじゃない。』

これが本当なんだ。

「健吾!おはよう^^」

「おはよう萌!」

「そういえば今日で一週間だね☆」

「え?もうそんなにかあ。」

「うん☆」

「……もう、隆生はいいんだな？」

「……なんで？もう好きじゃないもん。」

「じゃあ……」

「うん……？」

「ずっと俺の所にいるって約束しろよ？」

「うん・・・・。」
「」

これが、小学校5年生の小さな3人の恋のお話。

春休みにはいった。

今年は6年生。

・
・
・
・
・
そこで、あるコトがおきる。

第11話 約束（後書き）

メッセージよかったら下さい♪

第12話 引っ越し

6年になり、2ヶ月が過ぎた。
6月のこと。

「なあー・・・萌・・・」

「ん？どしたの、健吾？」

「俺さあ・・・」

「うん？」

「・・・やっぱなんでもない！」

「なんだよおー！！」

最近こうゆう会話が続いていた。

・・・健吾の様子が少しおかしい。
どうしたんだろう？

それが1週間も続き、さすがにおかしいとおもい、
聞いてみることにした。

「ねえー！健吾お・・・」

「なんだあ？」

「最近健吾おかしくない？」

「・・・そ・・・そうか？」

「うん・・・おかしいよ。」

「そ・・・そりゃあなあ、い・・・いつもおかしいモンなあ・・・」

「ほら・・・何かウチに隠し事してない？」

「え・・・い・いや・してない！」

「うそつけ！！！」

「・・・」

「隠し事はしないで・・・」

「・・・でも・・・」

「でも何？」

「・・・聞いておどろくなよ？」

「うん・・・」

「俺・・・」

「俺、夏休みに引っ越すんだ。」

「え・・・？」

「うん．．．ごめんな。萌。」

「ど．．．どこに行っちゃうの？」

「大阪。」

・・・!?

ココは東京。

大阪まで行っちゃうの？

健吾が？

もう・・・居なくなっちゃうの？

「ごめん・・・。」

健吾が静かに涙をこぼした。

「健吾・・・。」

「俺・・・行きたくねえよ。」

萌は健吾を抱きしめた。

「・・・泣かないでよ。バカ・・・！」

悲しかった。

隆生を忘れ、

健吾と付き合おうと決めたあの日から、

まだ、5ヶ月。

これからまだまだ思い出が作れるところ。

・・・どうして？

それから二人はたくさんの思い出を作るために、
いろんな場所に出かけたりしました。

そして、夏休みに入った。

健吾の引っ越し日。

「健吾・・・」

「・・・萌。」

「本当に行っちゃうの？」

「・・・おう。」

「・・・バカ・・・」

「ごめんな。」

「・・・」

「萌、話があるんだ。」

「うん。」

そのまま二人は近くの公園に行った。

「ごめんな。ココまで着いてきてもらって。」

「ううん！全然いいの！」

「あなさ。」

「うん・・・・・・」

「別れよう。」

「え？」

第12話 引っ越し（後書き）

良かったらコメント下さい！

第13話 突然の別れ（前書き）

前回のあらすじ☆

萌と健吾は5ヶ月もの間付き合っていた。

でも健吾が突然引越すコトに・・・。

引越す日に突然「別れよう」と述べた健吾。

萌はいったいどうするのか!?

第13話 突然の別れ

別れよう・・・？

「な・・・なんで？」

「わかってんだぞ！」

「何が・・・？」

「お前・・・まださ、」

「うん・・・」

「隆生が好きなんだろう？」

なんで？

もう隆生は良いのに。

タダの他人。

「なんで？好きじゃないよ！」

「いい加減、嘘着くのやめろよ！自分に素直になれよ！」

・・・。

萌は素直になって、この答えが出たんじゃないの？

「俺、分かってんだぞ。」

・・・無言で居るしか出来なかった。

「いつも、お前は隆生を目で追ってたんだから。」
「え・・・？」

「隆生と廊下ですれ違うと目で追っていたり。」

「・・・」

「球技大会の時も、俺じゃなくて隆生を見てた。」

そういえば、そうなのかもしれない。

もう、あきらめたはず。

でも、涙が出てくる。

健吾の眼は、真っ直ぐで何でも見透かすような眼。
やっぱり、

健吾に隠し事は出来ないね。

「だから、お前は隆生との方があうと思う。」

「・・・ごめんね・・・」

「お前が泣くなよ！失恋したのは俺なんだから。」

「・・・ごめんね・・・ごめん・・・」

「そのかわり、約束。」
「・・・うん」

「絶対隆生と幸せになれよ？」

「うん・・・ありがとう。」

そのまま健吾は萌に優しくキスすると、
車に走っていった。

ありがとう健吾。
楽しかったよ。

今まで、最高の時間をありがとう。

きっと、健吾のコトは忘れられない。
ううん。忘れたくない。

今はまだ、隆生に思いを伝えることは出来ないかもしれないけれど・

・
健吾に言われたんだもん。
伝えなきゃね。

萌はまた前を向いて歩き出す。
もう後ろは振り返らない。

第14話 転入生

健吾と別れて、1週間が過ぎ、新学期が始まった。9月。萌のクラスに転入生が来た。

ガラガラッ

「はい！静かにしなさい！今日は転入生が来たぞ！」

「えー？まじ！？みんなー！転入生だって！」

「まじ？うおー！カワイイ子かぁ！？」

「ほら！静かにしなさい！」

「入ってきて良いぞ！」

そこに入ってきたのは、

小柄で、髪の毛の長い、お人形みたいな女の子だった。

「おはようございます！名古屋から来ました☆上山栞です！」

そのこは高くてかわいらしい声で自己紹介をした。

クラスの男子のほとんどの目がハートになっている。

「じゃぁ・・・隣は岡本だ。」

「う・・・うち！？」

すると栞ちゃんは萌の方を見て、にっこり笑った。

とことこと足音を軽く立てて歩いてくる。

「よろしくね♪」

「あ・・・うん！よろしく☆」

この子はそれから・・・

萌といつも一緒に、いつの間にか、

お互いの悩み相談もするくらいになった。

隆生とは、少しいや、たまーに話すくらいだった。
なにか係が一緒だったりするとき、連絡で話したり。
ほんとにそれだけ。

でも、

9月の終わり、投稿中にたまたま隆生が一人で
歩いてるのを見つけた。
萌は走って隆生の所にいった。

「隆生おはよー！」

「え・・・あ！？お・・・岡本！よっ。」

久しぶりに話しかけてきたので隆生が驚いた顔をしている。

「・・・元気？」

「え・・・あぁまぁ・・・元気だけど？」

「そっか・・・」

「おう・・・」

少しの間沈黙が続いた。

先に喋り出したのは隆生だった。

「・・・岡本。」

「ん・・・？何？」

「け・・・健吾とはどうなってんだよ・・・」

「健吾？あぁ・・・もう、別れたよ。」

「えッ？別れた・・・？」

「うん。夏休みに。引っ越したじゃん？あの日にむこうから・・・」

「なんで・・・？なんで別れたんだよ！？」

「・・・・・・・・・・ウチにね。好きな人が出来たから。」

「え。。。？」

「ウン。だからカナ・・・。」

「あ・・・・・・・・そう・・・・・・・・」

「ま、岡本なら一人でも大丈夫だろ！」

「なにー！？一人じゃないしー！！！！！」

「へーんだ！」

その日から二人はまた元に戻ったんだっけ・・・

デモ正直。

まだココロのどこかに健吾が居る気がした。

もう少しで中学生。

大丈夫。

健吾。

あなたの願いが萌が幸せになることなら。

健吾のために。

自分のために。

この願いをかなえて。

きっと・・・・・・・・いや絶対に幸せになるよ。

「幸せになりたあー！ーい！ー！！！」

萌が叫ぶときっと健吾はこう言う。

「何いってんだよ！もう幸せなんじゃねえの？」

「・・・そうだね」

きつと忘れない。

健吾との日々を。

また今日も栞と隆生と笑って

幸せな毎日を過ごすんだ

第15話 贈り物（前書き）

更新遅れてすみません（^―^；）

第15話 贈り物

10月10日・・・・・・・・・・。

忘れていた。

今日は萌の誕生日。

自分の誕生日を忘れるなんてねえ・・・
自分で思った。

「ういーっす！」

「おはよー！隆生ー！」

いつも通りの朝がはじまる。

「・・・あのさ。」

「うん？」

「今日の放課後」

「うん」

「一緒に帰ろうぜ？」

「え！？ああ・・・いいよ？」

めずらしい・・・

隆生から一緒に帰ろうと言われるのは初めてだった。
なんだろう？

萌はその日、女子には誕生日のお祝いをされた。
それだけで嬉しかった。

でも、すごく気がかりなコトがやっぱりあった。

隆生から一緒に帰ろう！と言われたこと。

なんで言ったのかな？とか、
なんか言われるのかな？とか、

「お前のこと嫌い。」とか

いろいろ言われるんじゃないかと思い、ずっと考えていた。
隆生があそこまでためて言うのはそうそう無い。

「もおーえ☆」

「ん？なあに栞？」

「萌、お誕生日おめでとう☆」
相変わらず、ギャル口調で喋る栞。

「ありがとう☆」

「はい、コレ、プレゼントだよおー！！！」

「えー！！！！いいのお？さんきゅー☆」

あけてみると、文房具とシュシュ。

「うわー！！カワイイ！」

「でしょ？でしょ？」

そんな風にはしゃいでいると、何か視線を感じた。
視線を感じた方を見ると、
隆生がこちらをじっと見ている。

「な・・・なに？」

と言うと、隆生は何も言わずにどこかへ行ってしまった。
どうしたんだ？

その後も、隆生の不振な行動は続いた。

そのまま放課後。

「萌！」

「ん???」

「か・・・帰ろうぜ!」

「・・・うん?」

なんだかギクシャクしている。

帰り道

しばらく沈黙が続いた。
すると、

「なあ・・・萌。」

「ん?」

「えーっと・・・あの・・・その・・・」

「なんだよおー!はつきり言えよお!」

やっぱり変だ。

「だから・・・その・・・た・・・」

「た?」

「た・・・」

「たって何?」

「たん・・・」

「たん???」

「あーもう!」

「何さあ!ちゃんと言ってよ!意味分かんないし!」

「だからあ!」

「うん。」

「誕生日おめでとう!!!!!!……っていつてんだよ!」

「え!?!」

隆生から意外な言葉がでた。

誕生日おめでとう? 隆生がウチの誕生日をおめでとうって?

「あーもう! 一言いうのが疲れる!」

「あはははははッ!!!!!!……!」

「な……何笑ってんだよ!」

「だって……隆生おもしろお……!!!!!!」

すると隆生は少しはずかしそうにむすっとした。

「あ、あと、これ――」

隆生が差し出したのは中くらいのピンクの袋。

「え? くれんの!?! ありがとう!!!!!!」

「おう! あ……でもお前氣に入るかなあ?」

「あけていい?」

「おう。」

あけてみると、ウサギのぬいぐるみ。

あれ？隆生、萌がウサギ好きなの知ってたっけ？
まあそんなのは気にせず、

「ありがとう！！！！萌、めっちゃウサギ好きなんだ！」
「よかった^^」

帰ったその日、

健吾からおめでどうの手紙が来ていた。

今日は最高の一日だった・・・♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0582h/>

LOVE□HEART

2010年10月9日23時02分発行